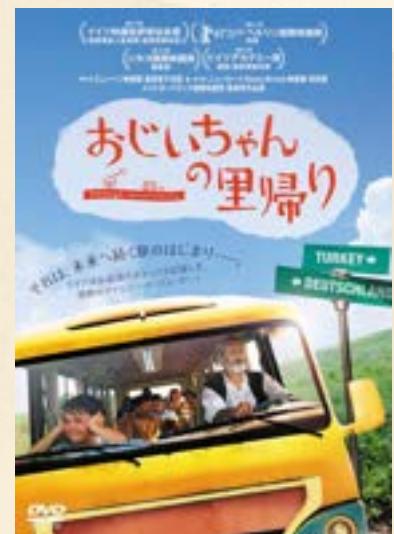
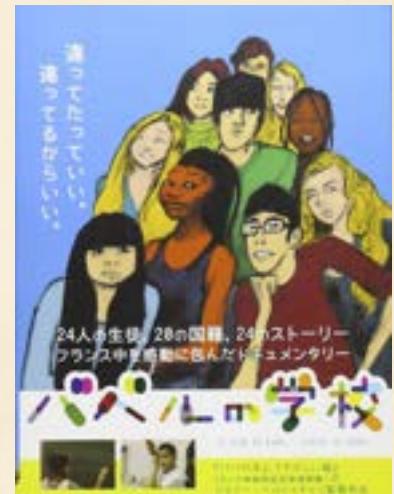


KDLスタッフが選ぶ！ 今月のおすすめ資料

2025 December

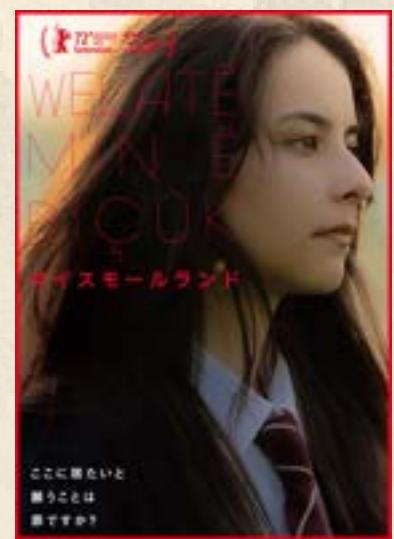


トルコからドイツへ移住した一家三世代の姿を、ユーモアを交えて描くロードムービーである。物語は、1960年代に労働者としてドイツへ渡ったフセインが、祖父となった今、突然「故郷に家を買ったから戻る」と家族に宣言する場面から始まる。道中では、若き日のフセインの記憶と、祖父となった現在の姿が交差し、二つの時系列が並行して描かれる。その旅路の中で、価値観や国籍観が違う家族たちが衝突し合いながらも、それが自分のルーツと向き合っていく。



フランスに移住してきたばかりの子どもたちのために設けられた、公立中学校の適応クラスでの一年間を記録したドキュメンタリー。20の異なる国籍を持つ24人の生徒たちは、それぞれの事情を抱えて異国へとやって来て、新しい生活の中でさまざまな困難に直面する。習得途中のフランス語で互いにコミュニケーションをとりながら、苦労や悩みに向き合い、次第に友情を深めていく。

移住した子どもたちが抱える悩みと、彼らの宗教観、人生観、そして生活に対する思考を忠実に記録している。



難民申請中のクルド人一家が日本で慎ましく生活する日常から始まる。高校生のサーリヤは、日本社会に溶け込みながらも、家族が抱える不安定な在留資格や、異なる文化の狭間で揺れる自分の立場に悩む。やがて彼女は日本人の少年と出会い、ささやかな恋や将来への希望を抱くが、家族の在留資格が却下されることで、その日常は一変してしまう。

難民や国籍、文化の違いといった社会問題を、ひとりの若者の視点から静かに問いかける。

国連IOM「2024年版 世界移住報告書」によると、国際移民は世界でおよそ2億8,100万人、紛争や暴力、自然災害などによって国内で避難生活を送る人々も1億1,700万人を超えていました。「人の移動」は今やどの国にとっても身近な現象となり、共に生きる社会のあり方が問われています。

今月は、異なる言葉や文化の中で学ぶ子どもたち、見知らぬ土地で新たな生活を築こうとする家族、そして老いてなお故郷を思う人々など、多様な移動の物語を描いた作品を紹介します。それぞれの旅路を通して、「境界を越えて共に生きる」とは何かを考えてみませんか。



1970年代の西ドイツを舞台に、孤独に生きる中年女性エミと、モロッコ出身の青年移民労働者アリの出会いから始まる物語。二人が惹かれ合い、寄り添おうとするほど、周囲の冷たい視線や差別、社会の偏見が二人の関係をむししばんでいく。

年齢・国籍・階級といった境界が生む暴力を、静かな画面構成と緊張感ある演出で浮き彫りにし、愛と不安が交錯する人間関係の脆さを鋭く描く本作は、当時のドイツ社会に根強く残る排除の構造を批評的に提示し、今なお普遍的な問いを投げかける。



ドイツの中流家庭がシリア難民の青年を受け入れたことをきっかけに、家族や周囲の人々がさまざまな価値観の違いに向き合っていく姿を描いたコメディドラマである。政治的な立場の違いや無自覚な偏見、それ違いや誤解が次々と起こりながらも、彼らは互いを理解しようと少しずつ歩み寄っていく。

ユーモアを交えながら移民受け入れをめぐる議論の複雑さを描き、同時に「ともに生きる」ための対話の大切さを温かい視点で示す作品である。



韓国で生まれアメリカに養子として渡ったアントニオが、家族と暮らす日常の中で突然「強制送還」の危機に直面する姿を描くドラマである。幼い頃に米国へ連れて来られ、市民として生きてきたにもかかわらず、法制度の空白によって「この国に属していない」と扱われるアントニオ。理不尽な状況に向き合いながらも、妻と幼い娘のために自らの居場所を守ろうとする。

移民制度の矛盾やアイデンティティの揺らぎ、家族の絆を静かに、そして力強く描いた作品である。